

岡崎英彦「本人さんはどう思ではるんやろ」(3)

—共感の方へ—

びわこ学院大学元教授 元びわこ障害者支援センター所長 遠藤 六朗

糸賀—生命・〈身〉・共感

糸賀福祉思想は生命思想を基調とし、その核心は共感にあるといってもよい。「糸賀一雄最後の講義」（1968年9月）。そのほとんどが共感の宣揚である。糸賀は人間を関係的存在としてみる。古風な言い方になるが、「汝がいて我が在る」ということ。その関係（糸賀は「間柄」と言っている）そのものが「共感の世界」だと言うのである。そして、深く読みこんでいくと、生命そのものが共感すると糸賀は言っていると思う。

この生命観は、1950年前後の近江学園創設後にやってきた幾重もの苦しみのなかで深められた。岡崎はそういう糸賀を側でみていて、その苦悩と思索のなかで糸賀の生命観が実践的に深められたと言っている。糸賀の「生活即教育」（1952年）。要するに、生命はこの身にあり、それを越え出たところにはない。よく知られている糸賀の玄米食による食養論はその考え方に基づく。生命とは「今ここに生きている」実感であり、生命は感じている〈身〉にある。この〈身〉即生命は絶えず自己を持続しようとし、よりよき自己への欲求、意欲を持つ。だから糸賀は、この持続し自己実現しようとする生命を「幸福追求の一つの流れ」とみる。これが生命の根源的事実であり、この根源にさかのぼっていくことを、糸賀は「純粹体験」とよんでいる。まさにこれは西田幾多郎「善の研究」の「純粹経験」ではないだろうか。共感とは、お互いのこの純粹な体験から発する。こういうことから、生命即〈身〉即共感ということといえるだろう。

岡崎にとっての「共感」

糸賀亡き後、岡崎は「この子らを世の光に」を自分のものとする歩みを始めた。岡崎にとっても、その関心はやはり共感にあったはずである。しかし、その著作にはこの「共感」という文字はほとんどみられない。岡崎は糸賀の生命観を、「裸のいのち」「なまの欲求」「生活意欲」、それらを「エモーショナルなもの」として理解していく。その「エモーショナルなもの」に「人間関係の最も深いとこ

ろからの“幸”」があるとみる。それは「いのちのつながりの火」であり、それが出会う場所である。これは糸賀がいう「共感」とよぶにふさわしい。しかし、「共感」という文字はそこにもない。

糸賀 房（糸賀夫人）は「岡崎英彦追想集」で「科学者の岡崎さんに対し、どちらかといえば感情の強い糸賀」とその違いを端的に書いている。糸賀は情熱の人であり、現実の先端に鑿（のみ）をもって穿（うが）ち、この子らを共感的に理解していく。これに対して、岡崎は医師であり、現実を科学的に、自分の外のものとして対象化し客観化する。確かにその違いに鍵がありそうだが、ことはそう単純ではなく、岡崎なりの苦心があったのではないか。

岡崎は「エモーショナルなもの」の作用に両価性（+と-）をみた。適度に働く時は+となり、共感が生まれ主体的な動きとなる。しかし、客観的な目ではエモーショナルなものは生まれない。むしろ、岡崎の「人間を知る」という好奇心、それが共感するとは何か、その方向に向かわせた。それが次の著作である。

「共に生きる」を読む

（「びわこ学園だより24」1983年9月）

これはびわこ学園20周年を迎えた1983年に書かれている。混乱と苦しみ、試行錯誤の20年。そのなかで、「馬車馬」のような「裸のかかわり」をもって乗り越えてきた。それでも、「私達はまだ園生の気持を的確に知る目をもっていない」とし、だからといって、「客観的に彼等を見るだけの目では、矛盾をこえる彼等の育ちの力にならない」と書く。彼等を客観的な、つまり外のものとしてみる目ではとらえることができないのだと言う。

「日々さまざまな枠を強いられる園生のやり切れない悩み、怒りを私達も切ない思いでうけとめ、それを心に秘めて、彼等の喜びや積極的な意欲をさそい出す、ひたむきな、裸のかかわり」が大事だと言う。「裸のかかわり」、それは「お互いに」生きている喜び、悲しみ、怒り、不安、痛み等を共に感じ、お互いの身体態勢が共鳴する。それがエモーション

の表現としての〈身〉である。彼等の「生」を感じ主体的に引き受け、さらに言えば、自らがそれをかきたてエモーショナルになることである。そして、その後に客観化していけばいいのだと、その時に客観的な目を養えばいい。そう岡崎は言っている。

ここには「共感」の文字はない。しかし、確かに共感のことを書いている。「こういう目を通して、当然園生自体の目、物事をうけとめる構えを広げるにちがいない」とし、「それでやっと気持ちの通じた、共に生きる『世界』が開ける筈です」と言う。

「本人さんはどう思てはるんやろ」 (以下「本人さんはどう」)

ようやく、この岡崎の「本人さんはどう…」にたどり着いた。「本人さんはどう」とは？—これは、本人さんの気持ちや思いをきちんと伝えられるような、そのような関係を本人さんとつくっているか、という問いかけである。そして、本人さんと関わる職員を、糸賀が必死の思いで伝えようとした共感を主体化していく方向へ向ける問いかけであった。彼らの「生」に主体的に関

わっていくことの大切さを言う。

岡崎はこう言っているようである。「共感とは何か」文学的には書けない、しかし、共感の覚醒に誘うことはできる、と。要するに本人さんを主体化し、職員自身も主体化していくということであると。そこに「人間を知りたい」という好奇心の岡崎らしい面が覗く。

今日的な課題に即して言えば、岡崎の「本人さんはどう」はどうとらえることができるだろうか。障がい福祉環境は岡崎の時代とは大きく様変わりした。それとどう向き合うか。やはり「本人さんはどう」にその鍵がある。客観的、外在的なものに主体を譲り渡すことなく、主体を本人さんとの関わりのなか引き戻すことである。お互いが持っている生命が共感へつき動かすはずである。

重い障がいのある人の人生を描くことができる時代となった今、なおも岡崎は「本人さんはどう」と投げかけたのではなからうか。岡崎の言う「人間を知る」こと、本人さんがもっとみえてくるに違いないし、もう一つステップを刻むことができるのでは、と。
(了)

—昨年、岡崎先生が亡くなられて30年が経ち、びわこ学園は創立50年を過ぎ60年目へ向かっています。利用者さんをはじめ、重い障害をもたれた方がた自身は勿論、社会情勢、福祉制度など今日まで様々なことが変化してきています。そんな現在、今後に向けて今一度初代園長である岡崎先生の思いを感じるべく、1年にわたって遠藤氏に投稿いただきました。繋がり支え合う「まるごとの福祉」時代だからこそ、彼らこそが起点となり、私たち関係者が繋がる、さらに新たな繋がりを創り続けていく中で、本当の意味での「共に生きる」社会が見えてくるのではないのでしょうか。

平成30年度

施設等実践報告会のご案内

開催施設等	開催日	開催場所
知的障害児者地域生活支援センター びわこ学園障害者支援センター (合同開催)	平成31年 2月9日 10:00~15:45	滋賀県人権センター(光荘) 滋賀県大津市におの浜四丁目1-14

お問合せ 知的障害児者地域生活支援センター ひまわりはうす 【担当】 堀尾(ほりお)
TEL: 077-527-0494

開催施設等	開催日	開催場所
びわこ学園 医療福祉センター草津	平成31年 3月2日 10:00~16:00	びわこ学園医療福祉センター草津 会議室 滋賀県草津市笠山8丁目3-113

お問合せ びわこ学園医療福祉センター草津 【担当】 久保多(くぼた)
TEL: 077-566-0701

上記実践研究発表会の詳細、および各施設主催の公開講座のご案内等については、ホームページ(<http://www.biwakogakuen.or.jp>)から各事業所ページでご確認下さい。